東日本大震災を経験して　岩手県立大船渡病院の活動記録

（熊谷質子ほか、ナース発　東日本大震災大震災レポート、東京、2011、47-71）

2015年11月7日、災害医学抄読会 http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/

※岩手県立大船渡病院：救急救命センターを併設した 489 床の広域基幹病院で、災害拠点病院。東日本大震災でも大きな被害を免れ、機能を維持し続けた。

(1)岩手県立大船渡病院　看護科コーディネーター

震災当日から災害対策本部で看護師長ミーティングを行い、患者数、栄養科への食事数、診療材料と看護備品の不足調査、支援物資の配給、災害支援ナースの配置などの情報を共有、さらに災害対策本部会議に出席して情報交換をおこなった。

また、他の県立病院、日本看護協会や全国各地から看護師や医療チームの応援派遣がおこなわれ、個人ボランティアとして活動する者もいた。看護科職員の士気も高く、支援の後押しもあって混乱なく看護活動を継続できた。

(2)災害拠点病院の外来看護師

震災直後から緊急医療体制と DMAT の召集が行われ、災害対策本部が立ち上げられた。

患者や避難してきた市民の中には恐怖や不安から、不穏やパニック症状を起こすものもおり、診察とケアによって大事にいたらぬよう努めた。低体温症や寝たきり患者、高齢者などはイエローゾーンから帰宅できず、在宅酸素療法をおこなっている患者は多くが入院となった。外来診療は地震発生 7 日目から開始された。多くの支援によって地域中核病院の役割を果たせた。

(3)震災を経験して

震災直後、多くのスタッフは家族の安否を確認できず、不安の中業務に取り組んでいた。在宅呼吸管理中の患児や、停電により HOT が使えなくなった患児などが来院し、患児数は急上昇した。停電によりパソコンが使えなかったが、院内 PHS は通じた。自家発電や食糧がいつまでもつのかわからない不安があった。仕事に没頭していたため、まだまだ現実を実感できていないが、この体験を風化させることのないよう取り組みたい。

(4)助産師 1 年目の立場から考えたこと

地震発生後、イエローゾーンに配属され、活動した。どんな状況でも冷静に

対応し、患者の安全を第一に考えること、医療者側は不安や疲れをなるべく患者に感じさせないこと、スタッフ間で励ましあい、支え合っていくことが大切であると感じた。スタッフが悲しみや苦しみを感じながら働く姿から、医療者としての責任を学んだ。

(5)東日本大震災で得たもの

救急センター病棟には、低体温症の患者が数多く入院し、自分の名前が言えないものは内陸の病院へ搬送された。全国からの DMAT や各施設からの医療支援チームの応援は心強く、被災によって人とのつながりの大切さに気づく機会となり、人の温かさ、思いやりを全身で感じた。

(6)母親として、看護師として

子どもをもちながら夜勤をする母親看護師は多数いる。震災後、大半の看護師はその日のうちに子どもと会えた。今回の震災で、ほとんどの看護師が母親としての責任より医療者としての勤務を優先したが、それは強制されたものでなく、使命感によるものであった。しかし、母親として子どものそばにいらえなかったことは辛い経験であった。

(7)東日本大震災における地域での体験

震災直後、広場に様々な死傷者が運び込まれ、診療所の医師とともに治療やケアにあたった。通信手段もなく、重症者を放射線技師とともに自分の車で搬送した。その後、通常勤務にもどったが、通常とは全く違う雰囲気で、普通に振舞おうとしても、患者に、震災でどのような体験をしたのか聞かずにはいられなかった。